

水俣で熊本医学例会

9月11日 水俣病中心に研究発表

さる廿八年の暮れ、水俣市の漁民部落に原因不明の水俣病が発生して満五年、熊大医学部はじめ水俣市立病院、新日窒付属病院、地元医師会などはその究明に努力をつづけてきたが、年四回熊本市でひらいていた熊本医学会例会をことは九月十一日水俣市で開催、水俣病を中心に熊大、水俣市立病院、新日窒付属病院などの権威約二百人が集まり、研究発表を行なうことになり、その成果が注目されている。

こんどの会合は第百六回熊本医学会水俣例会だが、九月十一

日午後一時半から同四時半まで水俣市西湯之見の山海館でひらく。この会合でとくに注目されるのは、いつもあまり発表を行なっていない新日窒付属病院の細川一、緒方久雄、小島昭和各医師らの「水俣病に似た小脳症状を主とする脳血管障害の一例」と題する講演で、熊大、水俣市立病院側の発表とちがうか、また特別講演として熊大第一内科徳臣助教授の「水俣病の臨床と病態生理」、同大小児科寶田教授の「小児における水俣病の臨床像」、同大病理学教室の武

内教授、神原助教授ほかの「水俣病の原理」は新日窒付属病院側と対照的な学説となるものとみられ関心がよせられている。

このほか水俣市立病院の武田省吾氏は「水俣病における尿中ポリフリン体代謝に関する研究」を発表、同病院三福内科医長らは「胃疾患に対するアスツール錠の使用経験」水俣・葦北郡医師会名譽会員松本敏氏は「臨床瑣談」と題する講演を行なう。なお同日は朝十時半から正午まで一行は新日窒水俣工場汚水浄化装置を見学したのち同市湯釜、茂道、月浦など水俣

病発生地域の現地視察、市立病院に入院中の水俣病患者を見舞うことになっている。